Kwansei Gakuin University

アルミニウス神学の形成と展開
—アルミニウス研究(1)—

木ノ脇　悦郎

序

アルミニウスの神学思想を解明する為に、われわれは前回の論文において彼が深く関わりを持っていた初期アムステルダム改革教会の歴史的背景とその展開について論じてきた[1]。その論述の文脈の中で、われわれはBangsの所説によりつつアルミニウスが基本的には改革派神学者であったという一応の結論に至ったのであった。また、同時に彼の改革派的神学の所論がアムステルダム教会の現実的課題と歴史的背景を深く理解し、その現実との関わりの中で実践的課題をも担いつつ形成されたものであったということがある程度理解されてきたのである。したがって、彼の神学的著作の多くは1603年にライデン大学に就任してから書かれたものであるとしても、その基本的性格はアムステルダムにおける牧師としての活動を抜きに考えることはできないのである。

従来のアルミニウス研究（というよりも、批判的見解）の多くが、アルミニウス自身の著作やその分析から導き出されたというよりも、むしろドルトレヒト教会会議の決定を前提として、アルミニウス主義と同一視する形で形成されており、最近の研究ではその修正がなされつつあることも既に述べた通りである[2]。ところで、一方でこのようなアルミニウス像の修正を求める歴史的研究がなされつつも、他方では従来の視点を保ちつついわゆる改革派的立場からの論述が続けられているということも事実として存在している。例えば、I. ジョン・ヘッセリンクの『改革派とは何か』という小著を取り上げてみる[3]。勿論、この書物の意図は改革派に対する偏見や誤解を改革派の原点であるカルヴァンの思想や初期改革派の信仰告白を検討し、現代の改革派教会に当てはめることでそれを修正し、改革派の真の姿とその根本思想、信仰を明らかにしていこうというものである。本書においてアルミニウス主義については随所に（批判的、否定的に）述べられているが、当のアルミニウス自身の神学についての論述は皆無である。歴史的に形成された改革派についての誤解を修正する為に、歴史的コンテキストの中から公平な修正を施したいというのであれば、アルミニウス主義の根源にあるアルミニウスについても言及がなされ、同時に彼についての誤解が改革派教会の中で、歴史的にどのように形成されたかを論じてこそ論述の公正を期することができると思われるのである。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

本論文では、アルミニウスの神学思想の形成を出来るだけ時系列に従って、その学問的背景を同時代のプロテスタント教会における神学の展開という文脈の中で検証するだけでなく、カトリック神学史とも対比しながら明らかにしてみたい。

1

アルミニウスの生涯についての最も古い直接的な言及はその友人であり、アルミニウスの葬儀に際して彼の生涯を講演したPetrus Bertius（1565–1628）の「アルミニウスの生と死」（*Vita et Obitu D. Iacobi Arminii*）である[(4)]。以下の論述は、このBertiusの文書に示されたアルミニウスの歩みを辿りつつ、最近の研究成果を取り入れてなされるものである。

1560年、アルミニウスはユトレヒト近郊のウーデウォーターに生を享けている。彼の最初の教育は、町の聖職者であったTeodore Aemiliusによってなされた。「基礎教育を受け容れやすい若い年代に、彼は注意深くラテン語ギリシャ語の基礎を教え、宗教と徳の原理を吹き込んだのである」[(5)]と書かれている。ラテン語本文に見られるように、アルミニウスは当時既に父親を失っており、気の毒に思ったAemiliusがこの有能な少年の教育を引き受けたということであろう。その教育が、後年アルミニウスの聖書への沈潜と瞑想を基礎付けたというのは同一箇所に書かれたBertiusの理解である[(6)]。ところが、この人が没することによってアルミニウスの教育は大きな転機を迎えることになるのである。つまり、生まれ故郷に旅行に来ていたRudolph Snellius（1547–1613）[(7)]にアルミニウスの教育が委託されるようになるのである。1575年、彼はSnelliusと共にマールブルクに移るが、その年の8月にスペイン軍によるウーデウォーター大虐殺の報を受け、悲しみの内にマールブルクを去って故郷に帰っている。そして再びマールブルクで学ぶ機会を得ていないので、マールブルクではほとんど何も学問的影響を受けたとは思われないのである。マールブルクに移っていたことによって危うくその生命を保つことができたとはいえ、その時の大虐殺によって家族、親族のすべてを失ったアルミニウスは全く天涯孤独の生涯を送ることを余儀なくされるのである。一方その前年に、このスペイン軍の侵攻に対して町をあげて抵抗し、スペイン軍を撃退したのはライデンであった。オラニエ公ウィレムはこの町の人々の勇気を称え、その報いの記念としてライデン大学を設立していたのである。それはウーデウォーター虐殺に先立つ半年ほどのことであった。

ライデン大学設立と学生募集の知らせを聞いたアルミニウスは、マールブルクを去りライデン大学に入るべく準備をするが、それに先立ってウーデウォーターの人々が亡命していたロッテルダムを訪ね、そこで生涯の友となるBertiusの父親、Peter Bertius

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

にその才能を見出されることになるのである。Bertiusはそのことについて次のように述べている。「私の父は機会を逃すべきではないと考えて、学びのために私が渡っていたイギリスから私を呼び戻した。私たちはいっしょにライデンに送られた」[8]と。アルミニウスは第12番目の学生として教養学コースに申し込み、そこで神学、数学、哲学を学ぶことになるのである。ライデンにおけるアルミニウスの評価等については詳細を省略せざるを得ないが、学生の仲間から一目置かれ、教師たちの間でも高い評価がなされていたという事実だけを紹介するに止めよう。

ところで、ライデン大学は中世ヨーロッパの大学の伝統に従って、まず神学部が設立されている。しかし、当初教授の陣容は十分ではなくライデンの牧師であったCaspar Jansz Coolhaes(1534–1615)が、「神聖なる神学称賛」(De sacrosanctae Theologiae laudibus) という開学演説を行い、さらに最初の頃は神学講義も行っていたようである[9]。ライデン大学最初の専任の神学教授になったのはGuillaume Feugueraysであった。彼は神学部の主要な役割を、真理についての苦し紛れな口実を論じることではなく、原典によって旧、新約聖書の解釈をし、キリスト教の正しい理解を提供することであるとしている[10]。彼は1575年から79年までライデン大学で教えたのであるが、ライデンに来る以前1572年聖バルトロマイの大虐殺の時にはユグノーの説教者としてロンドンに亡命しており、従って信仰的には寛容な立場を堅持していた人物であるということができよう。その宗教的寛容性は1570年にオラニエ公に献じた文書にも明らかに示されている。その文書の中で、彼は君主が宗教問題に精通すべきであるという立場をとりつつ、その宗教的立場の故に国家やある宗教を危機的状況に陥れるべきではなく、また宗教は説得的に説かれるべきであり決して強制されるべきものではないと述べているという[11]。しかし、Coolhaesや彼の寛容な姿勢は後にライデンの厳格なカルヴァン主義者達と教会政治を巡る論争に発展していき、アルミニウスが直接その論争に加わったかどうかは別にしてもその状況への理解が彼のそれ以後の神学思想形成に何らかの影響を及ぼしたのではないかと考えることは不可能ではないであろう。

Feugueraysに続いて神学教授の職についたのはLambertus Danaeus（1530–1595）であった。Bertiusは「我らが博学なる教授Lambertus Danaeusは（アルミニウスの）天性の才能と成長、そしてその徳性の故に彼を称え、彼を模範として聖なる神学研究に喜んで精を出すようにわれわれを励ましたのである」[12]と報告している。Danaeusはフランス、ロワール地方に生まれ、オルレアンとパリで法律学を学んだ後、1559年に福音主義に転じてジュネーヴに移ってカルヴァンの下で神学を学び、1561年から72年までオルレアンの近くにあるギーンで牧師をしていたが、聖バルトロマイの大虐殺を経験した後、1574年ジュネーヴに戻り、牧師また教授としてTheodore Beza（1519–1605）と親しく交わり、その後厳格なカルヴァン主義神学者としてライデン大学に赴

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

任してきたのであった。彼は哲学と神学に関して優れた才能を持ち、特に教会教父とスコラ神学についての知識は大変深いものであったという。彼がライデンに赴任したのは1581年であり、アルミニウスはその秋にジュネーヴに移っているので、彼らの接触はそれほど長い期間ではなかったといえる。しかし、Bertius も述べているように、その短い期間に Danaeus はアルミニウスの才能と資質を高く評価しているし、アルミニウスも彼からの学問的影響を受けていたであろうことは想像に難くない。Richard A. Muller は、初期プロテスタント・スコラ主義の形成者の一人としての Danaeus がロンバルドゥスやトマス・アクィナスの著作に精通し、これらの中世スコラ主義を彼の神学のモデルとして用いていたこと、およびアルミニウスも同様の立場に立っていることを明らかにし、その影響関係を示しているのである[13]。

ライデン大学での学問的影響について論じる際に忘れてならないのは、先に触れた Snellius のことである。彼は1578年からその死の1613年まで、ライデン大学でヘブライ語と数学を講じており、その在職期間から察しても、アルミニウスのライデン大学在学中に接触があったことが分かるのである。さらに、先にも述べたようにそれ以前からの Snellius のアルミニウスとの関係を考慮するならば、その影響についても述べておく必要があろう。Snellius は新旧のアリストテレス哲学、論理学を学び、ルネサンス以降明らかにされてきたアリストテレス原典によりつつ、ケルンでアリストテレス哲学、論理学を教授していたのであるがマールブルクに移ることにより Petrus Ramus（1515–1572）[14]の論理学に惹かれ、アリストテレス論理学を批判するようになっており、ライデンではラムス論理学をもって学生達に影響を与えていたのである。Bangs によると、アルミニウスが Ramus に関心をもったのは Snellius を通じてであったことは確かであり、彼がジュネーヴに移って Beza の下で学ぶようになる前に自分が Ramus の弟子であると考えていたことはアルミニウスの思想的発展を考慮する際に重要な要因となるという[15]。

それでは、Ramus からの影響の内実はどのようなものであるのだろうか。Ramus 論理学の特徴はスコラ主義とルネサンス以降のヒューマニズムの結合した実践的思考を指しており、16世紀から17世紀にヨーロッパで広く影響を与えたものである。それは純理論的というより人間の現実に即した認識の方法を示したものということもできよう[16]。つまり、彼は論理学を実践的学問とする為に、一般的に理解可能な論述から始めて、それを特殊な事柄へと進めていくという方法を取る。その論理構造はあるカテゴリーを二分化し、それをさらに二分化して下位のものに進んでいくという方法で一般的なカテゴリーから特殊なカテゴリーへと展開されるものである[17]。

この Ramus の論理学は多くのプロテスタント学者にも用いられ、アルミニウスにとっては古い学問的方法からの自由を意味していたし、何よりもその実践的な性格が

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

彼を惹きつけたということができよう。Ramusは神学を「善く生きるための学問」として位置付けており、神学の最終目的は神学についての知識を得ることだけに止まるものではなく、それを用い実践することにあるとしている[18]。このようなことから、アルミニウスはラムス主義を新しい精神のしるし、すなわち非教義的、人間的価値への開かれた姿勢、実践的関心として是認し、その基本的姿勢や論理構造を彼のライデン大学就任演説である三つのOratioにも適用していると思われるのである。詳細については、Oratioを中心に彼の神学思想そのものを取り扱う論文において論じる予定である。この論述を終えるにあたって、Ramusの立場について簡単に触れておくことにしよう。注(14)において簡単に触れたように、彼は1562年ごろにカルヴァン主義に転向しており、その思想の傾向は基本的にカルヴァン主義のそれであったと思われる。しかし、様々な点においてジュネーヴでカルヴァンの後継者となったBezaとの違いも見られる。1570年にパリを亡命したRamusは、ジュネーヴで教授の職を得ようとBezaに依頼しているが、表向きは財政的理由によって、しかし事実は彼のアリストテレス解釈、論理学、哲学の理解の違いが原因でその願いを実現できなかったのである[19]。とすれば、Ramusを師と仰いでいたアルミニウスが、ジュネーヴにその学びの拠点を移すことによって厳しい状況に置かれるようになったことも肯けるのである。

2

ジュネーヴにおけるアルミニウスについてBertiusの論述を借りることにしよう。彼は1582年に，アムステルダム議会の決定によりジュネーヴ大学に送られ、学費の援助を商人達のギルドから受ける代わりに、将来アムステルダム教会で働くことを条件に21歳からの6年間をその地で過ごすことになったのである。ジュネーヴに着いたアルミニウスは、当時ローマ書注解で有名であったTheodore Bezaの所で学ぶことになる。彼は説得力があり、あらゆる学問の判断に最も優れていたからであったという。「アルミニウスは、従って他の誰よりも彼に従い、彼の真似をし、彼のようになろうとしたのである。(Works，注：ここで、彼は神学を学ぶ仲間として、後にお互いに非常に深い関係を持つようになったJohannes Uyttenbogaertと知り合い、共に学ぶのである)。しかし、暫くして彼はバーゼルに行くよう余儀なくされた。というのは、ジュネーヴ大学の主だった人達から好意を受けることが出来ず、称賛も得ることができなかったからである。その理由は，そう言われているように彼が優れた仕方で誰も反論できないようにPetrus Ramusの哲学を弁護し、個人的にもその傾聴者達に教えていたということであった」[20]。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

さらにBertiusは次のように続ける。彼は約1年の間バーゼルに止まるが、一緒に行った人達は，この町がアルミニウスに与えようとした名誉について証言している。それは彼の能力と誠実さに払われる敬意であった。しかし、どんな称賛を受けても彼は傲慢になることはなく、学部学生のためにバーゼル大学で依頼された講義もしぶしぶ引き受けたが、彼の神学的問題に関する講義は大変な評価を受けたのであった。Worksの注記によると、その時アルミニウスが選んだ題目はパウロ書簡のうちローマ書の数節を取り上げて解説することであったという。彼の詳細な解説はすべての学者から称賛を得たのであった。そしてBertiusは続けて、「彼がバーゼルを去ってジュネーヴに帰る時、バーゼル大学神学部は彼に博士の学位を贈る決定をしたが、その学位にふさわしい年齢としては若すぎると考えたので彼は丁寧にそれを断った」[21]と書いている。

以上のことから理解できるように、アルミニウスはライデンでのSnelliusの影響の下でRamusについてかなり高度な理解を持つようになっており、ジュネーヴ大学に学ぶようになった当初もRamistとしての立場を保ちつづけていたことが理解できるのである。それでは、ジュネーヴでの学びが彼の思想形成にどのような影響を与えているのであろうか。Bertiusはこの点に関して、何も明確なことは語っていない。

Mullerは、アルミニウスの神学的方向性がライデンでのDaneauに負うものであるとした上で、その神学的モデルは中世スコラ主義であり、その傾向はジュネーヴでのBeza門下としてさらに強められたと言明しているのである[22]。彼らの間にある論争は、後に予定論をめぐって激しくなされるようになるとはいっても、アルミニウスがBezaの下で学んでいた間はその問題についての論争は存在せず、Bezaが堕罪前予定説を堅持していたとしても、それが当時のジュネーヴにおける公的な信仰ではなかった。実際、予定論についてはその他の様々な見解が存在していたのである。ただ、先にも触れたようにRamus主義についての対立は残っていたが、バーゼルからジュネーヴに戻ったアルミニウスはその点について「これまでのような性急さについては、緩和するほうがよいと考慮した」（ipse quoque de impetu remittendum ratus）ようであり、Bezaもその年に、アムステルダムからのアルミニウスについての問い合わせに対して、非常に好意的、肯定的な返事を書いているのである[23]。さらにRamusをめぐって、アルミニウスを激しく批判していたGalesiusについても、アルミニウスが後になってスペインのアリストテレス主義者Francisco Suarez（1548–1617）やイエズス会神学者Luis de Molina（1535–1600）への関心を強めていった背後に彼の影響を見ることができるという指摘は重要であろう[24]。

アムステルダム教会の牧師となった後に、予定論をめぐって厳格なカルヴァン主義達との論争に巻き込まれ、ついにはドルトレヒト教会会議で異端の宣告を受けるよう

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

になったとはいえ、彼は神学的には基本的にカルヴァン主義者であったし[25]、論争の只中にあっても自らのカルヴァン的立場を明らかにしている。例えば、アルミニウスが、ライデン大学に移った後、1607年3月3日付にアムステルダム市長 Sebastian Egbertszoon に宛てた私信によると、自分がイエズス会神学者のものや Coornhert のものを推薦しているという噂が広められていることについてそれを否定し、次のように続けているのである。「私が他の何よりも勢力的に厳命していることは、聖書を読むことであり、またカルヴァンの注解書を読むことです。それは大学全体もまた同僚の考えでも証明されています。私はかつて私に倣って Helmichius がそうしていた以上に、カルヴァンを高く評価していますし、彼の注解は教父たちの著作によって私たちに伝えられるどんなものよりも価値があるのです」[26]と。Egbertszoon は彼の妻の従兄弟にあたる個人的に親しい人物であることを考えると、この書簡に現れたアルミニウスの考え方は他人に見せるためのものではなく、自分の本心を吐露しているものと見てよいであろう。このようなアルミニウスのカルヴァン評は、Beza の下で組織的にカルヴァンの神学を学んだジュネーヴ時代に形成されたものであることはいうまでもないことであろう。何よりも、アルミニウスを批判したカルヴァン主義者達の批判はカルヴァン自身からの批判ではなく、その後継者となった Beza を中心とする第2代目、3代目のカルヴァン主義者達の批判であることを忘れてはならない。

F. Stuart Clarke はアルミニウスのカルヴァン理解を取り上げて論じる[27]。その論文の中で、Clarke はまずアルミニウスがカルヴァン主義と違う教えを密かに教えていたという見方が、アムステルダムの同僚牧師であった Petrus Plancius（1552-1622）によって広められ、それが不幸にも伝統的にカルヴィニストの観点として定着していったことを前提にして、その訂正を目論んでいるのである。彼はアルミニウスが決して異端的な神学思想を持っているのではないと、その教説特に予定論を中心として解説し、カルヴァンや Beza の予定論に対して批判したのは彼のキリスト中心的な神学から来る必然的帰結であるとしている。そしてアルミニウスはカルヴァンや Beza が教会を回復させた人物であるとして高く評価しつつも、過ちを犯すこともあるとしたと論じ、このような過ちを論じ、訂正することこそカルヴァンの神学的業績のうちで守っていくべき重要な観点であると述べているのである。

一方、Bangs は宗教改革時代の信仰的、思想的多様性を前提にしつつ、アルミニウスの神学的特長を解明する為の論文を書き続けたのであるが、基本的には彼を改革派神学者として位置付けようというものである[28]。その際、Bangs はアルミニウスが受けた神学教育の中でジュネーヴのカルヴァン主義を受容していったことを明言し、アルミニウスの予定説、恩寵、自由意志に関する理解が神人協力説であるという批判に対しては、彼は基本的に宗教改革者たちが主張していた *sola gratia, sola fide* の立場

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

をその恩寵論の中で堅持しているものであるとしている。そして、予定論についての彼の立場はそのキリスト論的救済論との関係から問い直されるべきであるという所説は、先に述べたClarkeに通ずるものである。

このように、ジュネーヴでの教育の中で改革派としての神学を学び、それを自分のものとして身につけ、アムステルダム教会の現実の中でそれを展開していったという論議に対してそれを是認しつつも、別の視点から異論を唱えたのがMullerである。彼はアルミニウスについての先行研究を分析し自説を展開していく。その中でBangsの書物については16–17世紀の多様な要因との関係の中で位置付けられた好著と評価した上で、メランヒトンとオランダの教会の関係を別にすれば、その思想的展開が16世紀末から17世紀初頭の改革派神学、中世末期、宗教改革の先駆者との連続的発展の中で分析されていないと批判して、従来の研究の欠けをプロテスタント・スコラ主義、プロテスタント正統主義と関係付けて詳述しようと試みているのである[29]。

ジュネーヴ時代の最後の出来事をBertiusの言葉から聞き取っておこう。1586年、アルミニウスはホラント出身の有力者の友人Adrian Juniusの好意によって、彼とともにイタリア旅行をすることになる。Juniusは法律を勉強しており、後に州政府参事官におされた人物である。アルミニウスは当時大勢の聴衆をその講義で魅了していたパドヴァ大学の哲学教授でアリストテレス主義者のGiacomo Zabarella（1533–1589）の名声に惹かれ、この有名な教授の講義に参加するため、パドヴァに住居を得て、ドイツ人の貴族に論理学を教えることで生活の資を得ていたという。その後、急いでイタリアの他の所をも回り、全旅程で7ヶ月を費やした。Bertiusはその旅行について次のように報告している。「私は、この旅行が彼にとってある点では有益であり、ある点で不利益をもたらすことになったという噂をたびたび聞いたことを思い出す」（Saepe illum narrare memini; Italiam sibi et commoda multa, et damna attulisse）[30]。有益というのは、それまでただ聞くだけであったローマの醜悪でひどい状態を実地に見聞できたことであり、不利になった点では、それがアムステルダム参事会の喜ばないこととなってしまった事情と考えられる。アルミニウスは保護者の許可を得ることなく若者の性急さでイタリアに行ったのであり、そのことから彼が教皇のスリッパの前に跪き、接吻したという噂やイエズス会の集会にもたびたび参加したという噂が主張されるようになるのである。また、知りもしない枢機卿Bellarmine[31]と知り合いになったとか、正しい、正統的な信仰を捨ててしまったと言われるようになるのである。これはBertiusがアルミニウスの死後語ったことであるから、あるいはアムステルダムでの敵対者達が彼を貶める為にそのような噂を流布していたことも考えられるのである。しかし、彼らのそのような批判は全くありえない空虚な誹謗に過ぎないのであろうか。アルミニウスが1588年からアムステルダムの牧師として働き、1603年に

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ライデン大学に転じ予定論を中心とした論争に巻き込まれていく状況の中で、彼の思想が反改革派的でありむしろカトリック、特にイエズス会のそれに近いという判断が成り立っていたとすれば、そのような批判が事実に反したものであるとしても、状況判断からして批判者達の単なる誹謗中傷に過ぎないとするわけにもいかないことになるであろう。

次にわれわれは、Mullerを参考にしつつ中世末期、宗教改革期、そして17世紀のプロテスタント・スコラ主義の動きとアルミニウス神学の関連について論じることにしよう。

3

Catalogus Librorum Clarissimi Viri D. D. Iacobi Arminii, Quondam in Academia Ludgunensi Theolog. Professoris という文書が残されている。アルミニウスの死後、1610年、生活の資を得る為に家族が売りに出した彼の蔵書目録である(32)。その内容を見ると、アルミニウスの学問的関心の広さを見ることができるし、何よりも彼の学問的進展の軌跡を示すものということができる。教会教父、中世スコラ学、宗教改革者、同時代の神学者等々実に多岐に亘る書物が網羅されているのである。この多様性だけを見れば、そこから彼の神学的営為の内容を決定することはむしろ困難にさえ思われるほどである。

初代の宗教改革者達はカトリック教会に対立し、それぞれ独自の信仰思想を展開してきた。彼らは中世スコラ主義に対して論争を挑み、ためらうことなく自身の神学的著作を通じて自説を発表したのであった。ところが、彼らは全体としての神学体系を構築しようとはしなかったし、基本的な問題を解説して学問的に整理しようという試みを第一の課題としては持っていなかったのである。ところが、16世紀末から17世紀初頭の第２、第３、第４世代の改革的神学者達には自派の信仰を説明し、体系的に組織化し、自分達の神学を教える為の定義や方法論を確立しなければならないという課題が課せられたのである。そこで彼らが注意深く選択し、用いたのは中世末期のスコラ学的方法であった。勿論、聖書の権威であるとか信仰義認、恩寵の強調や二つのサクラメント等のような宗教改革初代の神学的問題との深い教義的連続性を持たせながら総合的に神学の体系化を図ったのである。しかしながら、正統主義あるいはプロテスタント・スコラ主義と呼ばれるこのような立場は、その時代においては過渡的な重要な役割を果たしたとはいえ、後には宗教改革初代の人々の思想を歪曲したものと理解され、否定的な評価を得るようになったのであった。

正統主義的な神学の中心となったのはルター派であるが、改革派の場合も同様な課

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

題を担っていたことは否めず、教義的連続性と新しい教義的体系化は特にキリスト論、予定論、選び、自然啓示へのアプローチとして現れている。アルミニウスの場合、初代の教義に対し予定論を中心として批判的な対応を示していることは事実であろうが、しかしそれを彼のスコラ主義によるものであるとの批判はあたらない。なぜならば、当時アルミニウスを批判していた人々も同様なスコラ的立場に立ちつつ、その教義の体系化に努めていたことは上にも述べた通りである。ただ、スコラ的立場という場合にもその思想的内容は多様であり、すべてが同一方向を向いていたというのではない。Muller によると、アルミニウスのスコラ的傾向は多様な著者からの影響を示しているという立場に立ちつつも、基本的にはトマス・アクィナスの思想を土台に構築されているという理解を提示している(33)。特に、その結語において、アルミニウスの神学がトマス主義の修正であるとした上で、それは彼に先立つ世代のカルヴァン派教師達とも類似性があると説明し、当時のカトリックもルター派神学者も同様な土台を共通のものとして持っていたという指摘は、当時の神学的営為はもとより、その背景を理解する為に重要なものといえよう。また、Muller はその論述の文脈においてスコラ主義を定義して、それが特定の神学、哲学的内容を指すものというよりは、問題を「理性的探求」によって一般の知性にアプローチしていく方法を指し示し、また受け継がれた権威や知られた事実、理性とキリスト教信仰とを科学的に解明し、知に達する為の視点を提供するものであるとしている(34)。このことからも、アルミニウスの神学形成におけるスコラ主義がトマス神学の主知主義的傾向を色濃く反映させるものでありつつ、それはいわば改革派初代以降の神学的課題と密接な関係にあったことが了解できるのである。

カトリック教会内部におけるこの時代の神学的動向についても一言触れておこう。宗教改革運動がカトリック教会の生活や神学にも影響を与えたことは周知の事実である。特に、ルターもカルヴァンも共通していたことは、アウグスティヌスを高く評価し、彼らの人間理解、原罪、恩寵と自由意志、予定論等々の教理がアウグスティヌスのそれに基づくものであると主張し、自らの神学が伝統的正当性をもっているとしていた点である。この時代にカトリック教会内部でもスコラ学は、多様な解釈を施されつつ新しい時代にふさわしい仕方で、広く取り扱われるようになっていたことは先にも触れたとおりであるが、ここでは別の動きとしてルーヴァン大学を中心になされていったアウグスティヌス主義の復興を紹介することにしよう。それは、改革的神学者達の間で、またその後継者達の間で論争となっていった恩寵と自由意志の理解に関わる問題とも密接な関連性を有するからである。

トレント公会議で未解決のまま残されたこの問題は、カトリック教会内でも論争を惹き起こしていくことになる。ルーヴァン大学教授、Michel Bajus（1513–1589）は、

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

自由意志についての主張をアウグスティヌス説と完全に一致したものとして次のように説明し、多くの論文を発表したのである。つまり、神が創造の時に人間に与えた本性は、その堕落によって完全に腐敗している。その堕落、腐敗をもたらした原罪の結果、人間は恩寵無しには常に罪に引きずられるのであると。そのことにより、人間の意志の自由は事実上否定されることになる。このBajusの主張は、その後世俗君主や教皇の関与をも巻き込みつつカトリック教会内で広く論争の的になっていくのである。ところで、イエズス会士のLeonardus Lessius（1554−1623）は恩寵と自由意志の共同作業を語り、人間の意志を重く見る教説を主張していた。当初、ルーヴァン大学はBajusの説に対して距離を置いていたが、Lessiusの主張の中に恩寵の必要性が軽視されたように見えると、急遽Bajusの側についてLessius批判に回ることになったのである。こうして、その他の要因も加わり、カトリック教会では恩寵と自由意志をめぐって論争が展開されるようになったのである。ドミニコ会とイエズス会の論争はその典型と見ることができよう。特にその創始者であるイグナティウス・ロヨラに倣って、人間の克己を強調するイエズス会の教育方針からすると、恩寵の働きを重要視するとしても、同時に意志の絶対的自由が保障されるのでなければならないのである。それに反するような教説に対しては、ドミニコ会がその説の権威的根拠としてトマス・アクィナスやアウグスティヌスを持ってしたとしても組し難かったのである。イエズス会のこのような自由意志教説の代表的人物がスペインのLuis de Molinaであり、彼の説はモリニズムとして広く知られ、カトリック神学者の間で論争の的となっていったのである。また、われわれの関心に引き寄せて考察すると、モリニズムは予定論に関してアルミニウスへの影響関係が最も強いものとして取り上げられるのであり[35]、今後アルミニウスの予定論論争を解明していく際に、その歴史的背景として重要な視点を提供してくれるものである。さらに、その問題に関連して生じた歴史的に重要な影響関係は、その後フランスにおいてヤンセニズムとイエズス会との論争という形でも展開されていったことは周知の事実である。

以上論じてきたように、アルミニウスの神学的形成においては当時の改革的神学者の課せられた課題、神学の体系化、組織化という要因が大きく働いており、そのために他の神学者達も用いていたようなスコラ学の方法を積極的に選び取って、それを利用していることが明らかとなった。しかし、彼がドルトレヒト教会会議において異端と断ぜられた理由はスコラ的要因の故ではなかろう。この問題については、今後の論文の展開の中でさらに明らかにしていくことになるであろうが、一応次のようにそれを纏めておくことにしよう。

アルミニウスの神学形成には、同時代の課題が大きく影響していた。しかし、基本

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

的には宗教改革者達の問題を継承しながら、その課題を展開していったのであり、その学びのそれぞれの時代にその教師達の提供する内容と素材を自分のものとしていったのである。Snelliusとの出会いの中で学んでいったRamusの論理学と哲学、ジュネーヴのBezaの下におけるカルヴァン神学、そしてジュネーヴに来る前にライデン大学の中にあった、寛容な姿勢と厳格な改革派との論争も将来の彼の思想形成にとって無関係ではなかった。しかし、アムステルダム教会に赴任して後の彼の神学的営為は、先の論文でも指摘しておいたように、教会の歴史的背景と現状を深く認識しつつ、誰にも認識可能なものとして形成されていったのである。その際、Ramus主義から学んでいた実践的視点を持った神学という方向性はさらに強められ、予定論をめぐる後の論争の原因を作ることにもなったのであろう。われわれは今後の課題として、アムステルダム教会で彼が論じ始めるようになった予定論批判の問題および彼の神学全体の見取り図をも取り上げなければならないが、その際にも、教会の現実における神学の実践的課題という視点が彼の神学の内容をも規定していたのではないかとの予測をうかがわせるものである。

さらに付け加えるとすれば、アルミニウスの立場を理解するということは、「神学と教会」という問題をどのように理解していけばよいかを指し示すための一つの歴史的事例であるといえる。それは重要で、具体的、興味の尽きない課題であり、一つの教会や教派、教団の歴史の中で神学的正統性とは何であったのか、あるのかを問い、さらに教会の歴史的現実において神学が果たす役割とは何であるのかを問うための格好の事例ともなりうるのである。

【註】

（1）「アムステルダムにおける初期改革派教会の形成とアルミニウス—アルミニウス研究（序）—」『神学研究』（関西学院大学神学研究会）第49号，2002年，67-90頁。

（2）上掲論文，6頁，注（1）、（2）、（3）参照。

（3）I. ジョン・ヘッセリンク著・廣瀬久允訳『改革派とは何か』，教文館，1995年。原文は *On Being Reformed: Distinctive Characteristics and Common Misunderstandings* (2nd.Ed), Reformed Church Press, 1988，本書は原題が示しているとおり改革派についての通常の誤解、偏見を訂正する為に書かれており、著者は序文の中でその誤解を解くためにはカルヴァンと16、17世紀の古典的な改革派の信仰告白を規準として判定すべきであると述べる（邦訳，22頁）。

（4）Bertiusは、生涯アルミニウスをよく理解し、アルミニウスの死後はライデン大学教授として厳格な改革派に対し、信仰と発言の自由を求めるレモンストラントの代表的人物として活躍するが、その立場ゆえにライデン大学教授の席を失うことになった人物である。原文は、*Petri Bertii de Vita et Obitu Reverendi et Clarissimi Viri, D. Iacobi Arminii Oratio* となっており、ラテン語版アルミニウス全集の冒頭に収められている。*Iacobi Arminii Opera Theologica*, Lugduni Batovorum, Apud Godefridum Basson,

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

1629, 英訳は *The Works of James Arminius (London Edition)*, Tr. by James Nichols and William Nichols, 3 Vols., Baker Book House, 1875 (Rep. 1996), Vol. 1, pp. 13-320を参照した。この英訳の大部分は詳細な注記に当てられている。

(5) Opera（以下、ラテン語全集はこのように表記する）Hic ergo puerum Patre orbatum simul atque aetas institutionis capax fuit, primis utriusque linguae rudimentis, et verae pietatis ac religionis principiis inbuendum curavit.（尚、ラテン語版のこの部分にはページが付されていない）
Works, 1, p. 17.（英訳版全集については、以下このように表記する）

(6) 全集原文では次のように表記される。Insedit ipsius animum ista exhortatio, confirmata postea lectione adsidi a sacrarum litterarum,et piis meditationibus. Works, 1, p. 18.

(7) Snellius は Works 脚注では語学に秀でた数学者であり、当時マールブルクで教授の位置にあり、アルミニウスをマールブルク大学の学生として迎えようとしていたという。Bangs によると、彼は最初ケルンで3年間アリストテレス論理学を教えていたが、後にマールブルクに移り、Petrus Ramus の論理学に惹かれていくようになる。1578年には永住の為、故郷のウーデウォーターに帰るが、ライデン大学の招きでヘブライ語と数学の教授として働くことになり、死の年までライデンで教えたという（Carl Bangs, *Arminius; A Study in the Dutch Reformation,* Abingdon Press, 1971, pp. 37-38.）
また、Richard A. Muller, *God, Creation, and Providence in the Thought of Jacob Arminius; Sources and Directions of Scholastic Protestantism in the Era of Early Orthodoxy,* Baker Book House, 1991によると、アルミニウスはその論理的基礎を彼から学んだ可能性のあることを示している。(pp. 15-16.)

(8) Opera の原文は以下のとおり。Quam occasionem pater non negligendam ratus, me qui tunc in Anglia litteris operam dabam, evocat. Simul ergo in hanc Scholam missi, Works, 1, p. 21.

(9) 元はカルトゥジオ会の修道士であったが、福音主義に移りヨーロッパ各地で説教者として働いた後、1574年にライデンがスペインの包囲から解放された直後、当地の牧師となった。彼は教会の役職の任免に関して世俗権力の介入を容認し、そのため後には教会の中で他の牧師達と対立、1582年ハーレムの地方教会会議によって破門されたが、1586年ハーグにおける国家教会会議で名誉回復を得る。しかし、説教職に戻ることなくアムステルダムで醸造業を営みながら神学的なパンフレットを書き続けた。神学的には予定説を否定し、洗礼を受けていない子供の祝福をも擁護し、実際的な信仰を強調して寛容の為に戦った（W. F. Dankbaar, Coolhaes, *Die Religion in Geschichte und Gegenwart,* 3. Auflage, J. C. B. Mohr, 1957, Bd. 1., pp. 1865-66）また、同じ RGG の第4版では Aart de Groot が同一項目を改定しており、その神学的傾向について「教義的無頓着と精神主義」を付け加えている。
J. I. Israel によると、彼の排除の原因は予定説を含むカルヴァン派教義を承認せず、教条主義的神学を拒否しルター派やアナバプテストとも対話を進め、宗教的寛容を擁護していた Koornhert との親交が改革者たちの目に留まったからであると、当時のオランダ改革教会の状況分析から述べている（Jonathan I. Israel, *The Dutch Republic: Its Rise, Greatness, and Fall 1477-1806,* Clarendon Press, Oxford, 1995, pp. 370-71.）。同様な歴史的分析は他にも James Luther Adams,Arminius and the Structure of Society, (ed.) Gerald O. MucCulloh, *Man's Faith and Freedom: The Theological Influence of Jacob Arminius,* Abingdon press, New York, 1962, p. 98.がある。

(10) John Platt, *Reformed Thought and Scholasticism; The Arguments for the Existence of God in Dutch Theology, 1575-1650,* E. J. Brill, Leiden, 1982, p. 119参照。

(11) Bangs, op. cit., p. 51参照。

(12) Opera, Memini quum Dominus Lambertus Danaeus doctor et professor noster publice illum ab ingenii dotibus et profectu, et virtute laudaret; nosque illius exemplo ad S. Theologiam alacriter capessendam excitaret, *Works*, 1., p. 21.

(13) Richard A. Muller, op. cit. pp. 17-18, 36-37参照。同様な理解は John Platt の中にも見出すことができる。J. Platt, op. cit., pp. 119-121.

(14) Petrus Ramus (1515-1572) フランス出身の論理学者で1543年『アリストテレス弁証法異論』(*Aristotelicae animadversiones*) を著し、アリストテレスを厳しく批判すると同時にパリ大学のカリキュラムを批判してフランソワⅠ世によって焚書処分に会い、教えることを禁じられる。フランソワⅠ世の

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

死後、王立教授団の教授に就任するが、1562年にはカルヴァン派に転向し1572年聖バルトロマイの大虐殺で殺害された。彼の論理学はその後論争の元となる。

(15) Bangs, op. cit. p. 38, 61. 参照。本書の中で、Bangs は 1 章を設けて Ramus の影響について詳述している（4, The Influence of Petrus Ramus, p. 56–63）。

(16) Walter Jackson Ong, Ramism, Ed. by Philip P. Wiener, *Dictionary of the History of Ideas,* Vol. 4, Charles Scribner's Sons, 1973, pp. 42–45.

(17) 1598年、アルミニウスは親しい友人、Uyttenbogaert に宛てた書簡において原罪と人間の救済について述べ、その際に本文で述べたような二分法をもって説明し、またそれを表記していることからも、その論理構造に Ramus の影響が大きいことがわかる。*Praestantium ac Eruditorum Virorum Epistolae Ecclesiasticae et Theologicae,* Amsterdami, Apud Henricum Wetstenium, 1684, pp. 41–44. 参照。

(18) Israel は、このような Ramus 主義の傾向を16世紀オランダの文化全般を視野に入れて、その影響の大きさを論じている（Jonathan I. Israel, 上掲書, p. 582.）。

(19) Bangs, op. cit., pp. 60–61.

(20) Opera の本文、Hunc igitur sibi prae aliis omnibus sequendum atque imitandum delegit. Sed quum non poset sibi statim praecipuorum quorundam virorum in ea Schola gratiam et favorem parare, idque (dicendum enim quod res est) ob solam Philosophiam Petri Rami, quam ille publice quidem magna contentione defendebat, privatim vero etiam suos auditores docebat, coactus est Basileam concedere: Works, 1, pp. 22–23. この部分の注記では、最初彼は個人的に Ramus とその論理学を弁護していたが、Uyttenbogaert を含む多くの学生達から求められて自室で論理学を講じていたという。ところが、ジュネーヴ大学の主だった教授の何人かが厳しい攻撃を加え、特にスペイン人の哲学教授、Petrus Galesius はアリストテレスの熱心な信奉者であったので、最大限の悪意で彼に対し、公的な布告でもって彼に Ramus を教えることを禁じたという（p. 23.）。また、Uyttenbogaert は、終生アルミニウスの友人としての立場を保持し、ハーグの宮廷説教者として働きつつレモンストラントの代表的な人物の一人になっていった。

(21) 本文は、次のとおり。ut ei Genevam discessuro facultas Theologica titulum Doctoris etiam publico sumptu detulerit : quem ille ut digniorem, quam qui in eam aetatem conferri posse; tunc quidem temporis actis gratiis modeste recusavit. Works, 1, p. 24.

(22) Muller, op. cit., pp. 17–21. 本書の 2 . Arminius' Theological Development in Its Historical Context（pp. 15–30.）を参照して、本項の論述の骨子は作られている。先にあげた J. Platt の文書も参照。

(23) Works, 1, pp. 24–25. の脚注に付された1583年 6 月 3 日付けの Beza の書簡参照。その中で、アルミニウスが学問的にも人間的にも神学部の最高の希望を担っており、今後も同様な仕方で進展しつづけるであろうという期待が明らかに見られる。

(24) Muller, op. cit., p. 21.

(25) 前出拙論，p. 82–83. 参照。

(26) *Praestantium ac Eruditorum Virorum Epistolae Ecclesiasticae et Theologicae,* Amsterdami, Apud Henricum Wetstenium, 1684, p. 185.
Sed post Scrpturae lectionem, quam vehementer inculco, et magis quam quisquam alius, quod tota Academia testabitur, etiam conscientia meorum collegarum, ad Calvini Commentarios legendos adhortor, quem laudibus majoribus extollo, quam ipse Helmichius, quod mihi fassus est, unquam fecit: dico enim, incomparabilem esse in interpretatione Scripturarum, et majores faciendos ipsius commentarios, quam quidquid Patrum Bibliotheca nobis tradit.

(27) F. Stuart Clarke, Arminius's Understanding of Calvin, *The Evangelical Quarterly,* 54, 1982, pp. 25–35.

(28) Carl Bangs, 前掲書の他にこの問題について直接言及した論文。Arminius and the Reformation, *Church History* Vol. XXX., 1961, pp. 155–170. 及び Arminius as a Reformed Theologian, (ed.) John H. Bratt, *The Heritage of John Calvin,* Michigan, 1973, pp. 209–222.

(29) Muller, op. cit., pp. 9–11,（1 . Arminius and the Historians, pp. 3–14 全体参照）また、同様な観点から書かれた次の論文をも参照。The Christological Problem in the Thought of Jacobus Arminius, *Neder-*

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

lands Archief voor Kerkgeshiedenis, No. 68, 1988, pp. 145–163, Arminius and the Scholastic Tradition, *Calvin Theological Journal,* No. 24, 1989, pp. 263–277.

(30) Works, 1, p. 26.

(31) Roberto Bellarmino（1542–1621）イエズス会の論争神学者。特に、プロテスタント神学に対して論駁を加えた。アルミニウスがイタリア旅行をした頃、Bellarmino はローマに Collegium Romanum を設立して、反プロテスタントの論争を指導していたのであり、彼との親密さを取り上げることによって、アルミニウスの非プロテスタント性を証拠立てようとしたのかもしれない。

(32) *The Auction Catalogue of the Library of J. Arminius; A facsimile edition with an introduction by C. O. Bangs,* Hes publishers, Utrecht, 1985は本書のリプリント版であり、筆者はこの版を用いた。

(33) Muller, *God, Creation, and Providence in the Thought of Jacob Arminius* の中で一項を設けてスコラ主義について論じている。Part 1, 3, Arminius and the Scholastic Tradition, pp. 31–54., また注(25)に揚げた、*Calvin Theological Journal,* No. 24の同名論文も参照。

(34) Ibid., pp. 275–77. 参照。

(35) Eef Dekker, Was Arminius a Molinist?, *Sixteenth Century Journal* XXVII/ 2 , 1996, pp. 337–352. この論文で、Dekker はアルミニウスが Molina の用いた概念、神の中間知 scientia media を利用して自由意志の働きを肯定的に捉えようとしたという説を主張している。Muller も同様にこの中間知をアルミニウスの重要な概念として論述を展開している。Muller, *God, Creation, and Providence in the Thought of Jacob Arminius,* pp. 154–166.

NII-Electronic Library Service